アフリカの大地を踏んで

「技術で人を幸せする。」という、木村先生の情熱的な講義から2年後。初めて、アフリカの大地を踏みました。アフリカの道の多くは、車で走っていると、全身が振動するほどの揺れを感じます。その揺れから、道直しの必要性を実感しました。

道直しが完了した現場に到着し、福林さん達を見つけると、村の人達がぞろぞろとやってきて、一緒に案内してくれました。道直しを率先していたメンバーの方達だそうです。彼らの表情は、とても誇らしげで、「俺達の道を見てくれよ！」と言っている気がしました。彼らの道には、とても深い所にカルバートがありました。当時は、その機能が理解されておらず、土が堆積し、何十年も埋もれてしまっていました。しかし、村民の方とコミュニケーションを取りながらプロジェクトを進行していると、老人の方が「かつて、あそこにあった。」と、その場所を掘ると発見されたそうです。初めから技術者が排水の重要性やカルバートの機能を伝えていけば、埋もれてしまうことはなかったでしょう。道普請人の活動は、技術伝授だけでなく、現地の人とのコミュニケーションも大事にして進められているのだと感じた瞬間でした。「みんな一人ひとりがエンジニアだから、もう大丈夫だね？」と聞くと、「もちろん！」という心強い返事。さらに、土のうの技術を応用して村民の人達が作った橋も見せてもらいました。道も、この橋もずーっと大事にされていくだろうと、確信しました。

現在、ケニアの就職難は深刻で、仕事のない若者も多くいます。そんな若者たちが、道直しに参加してみる。目に見えて、道がきれいになる。村の人に感謝される。もっと頑張る。と、流れがついたら、本当にすごい勢いで道直しが進む、と伺いました。「自分たちの道は自分たちで直せる。」という意識が広がれば、自信となります。そして、きれいな道はインフラ機能を高め、仕事にも繋がります。農村部における道は、全ての原点なのだと感じました。

この旅に参加するまで、国際協力は、手取り足取り教えて、スタートから目的地までの線路をひくようなイメージがありました。けれども、そうではなくて、道標のような役割なのかもしれません。初めはみんな道標を頼りに、進み始める。気付いたら、道標を見なくても、話合いながら、工夫しながら、ちゃんと進んでいる。

そして、喜田さん、松本さん、福林さんをはじめとする、国際協力の現場で活躍する方との出会いは刺激的で有意義でした。事務所で毎晩語られる、喜田さんのアフリカ大変物語。私には想像できないような苦労もあったでしょうが、本当に楽しそうな表情の喜田さん。自らの職業を、「天職」とおっしゃり、「アフリカの人を尊敬する気持ちを常に忘れない。」という言葉が印象的でした。相手を敬い、技術や知識だけでなく、ワクワクさせるような情熱や人柄があるからこそ、アフリカの人も「この人の言うこと、試してみようかなあ…！」という気持ちになるのではないのでしょうか。実際、私たちも皆さんにすっかり惹かれてしまいました。それと同時に、たくさんのエネルギーをもらった気がします。「英語も勉強も人生も頑張ろう。たのしもう！」とやる気になりました。

最後になりましたが、今回このような機会を与えられましたことに感謝しております。アフリカの大自然の色彩、出会い、見たもの、聞いたこと、肌で感じたこと全てを心に焼き付けておきます。この旅で得たものを、何らかの形で還元していきたいです。

木村先生、喜田さん、福林さん、松本さん、本庄さん、お世話になった皆さまに感謝して、終わらせて頂きます。ありがとうございました。